人文科教育研究　22　1995年　pp. 15－21

「水仙月の四日」の主題と主題関連発問

横　山　明　弘

序論

「水仙月の四日」は，1924年（大正13）12月１日に刊行された『注文の多い料理店』に収録されている。この時作者の年齢は28歳であった。その童話集の目次の作品表題の下には「1922.1.19」という日付けがある。まず作品に関するいくつかの評言を年代順に紹介しておく。

＊ひとり童話のみに限らず，あらゆる文學作品を通じ，雪を描いてこれほど光彩陸離たる文章を私は見たことがない[1]。

＊「水仙月の四日」と「ひかりの素足」は，かくて，わが国の雪嵐をえがいた文学作品として当然最高のものになったのである[2]。

＊作品のなかに降りつくした「水仙月の四日」の雪は，かつての宮沢賢治における日常性に死をもたらし，詩人への生まれかわりをしるすものであったのである。いったい，水仙月という月の名そのものが，新生の季節を意味するのであろう[3]。

＊「水仙月の四日」は『注文の多い料理店』中の白眉である[4]。

＊「雪渡り」「やまなし」などとともに，賢治文学の最高の傑作であると思うのだが，意外に，この作に言及したものは少ない[5]。

＊一夜のうちに展開される季節のめぐりという壮大なドラマ展開と優しい心のドラマとがよく釣り合って，短篇ながら読みごたえのある作品である[6]。

このように見ると総じて高い評価がなされている。特に酒井角三郎の「詩人への生まれかわりをしるすもの」という，作家論的観点からなされた評言が目を引く。

この論文においては，諸家の見解を検討しながら，主題と主題と関連する主要発問の考察を試みたい。主題と関連する主要発問の考察を試みるのは，私の主題観を検証するためと，主題がどのように効果的に表現されているかを見るためである。

尚この作品は，1990年度より三省堂の中学１年生用の教科書「現代の国語１」に採録されている。

1　作品の主題に関する考察

私は主題を抽出する作業の中心を葛藤の読みに置いている。この作品の中心人物である雪童子の葛藤は，「しばらくたちどまつて考へてゐましたがいきなり烈しく鞭をふつてそつちへ走つたのです。」という文に表れている。私はこのように葛藤が集中的に表現されている文を葛藤提示文と呼んでいる。ところでこの葛藤の内容は，雪婆んごの「降らすんだよ。」という命令どおり職務を

忠実に果たすか，それとも子供の声を聞いて子供を助けようかという問題である。

「雪婆んごのふりみだした髪が，その顔に気みわるくさわりました。」という文は，雪童子の視角から描かれていると読むことができ，雪童子が支配者である雪婆んごのことを気にかけ，様子を窺っていることが分かる。雪婆んごは，「猫のような耳」・「ぼやぼやした灰いろの髪」・「ぎらぎら光る黄金の眼」・「裂けたやうな紫の口」・「尖った歯」などと描かれ，作者によって権威づけられている。その雪婆んごから「おや，おかしな子がゐるね，さうさう，こつちへとつておしまひ。」という新たな命令が下る。それに雪童子は，次のように対応する。

「えゝ，さうです。さあ，死んでしまへ。」雪童子はわざとひどくぶつつかりながらまたそつと云ひました。「倒れてゐるんだよ。動いちやいけない。動いちやいけないつたら。」

つまり雪童子は子供を激しく倒すことによって，雪の中に埋め，雪の断熱効果を利用して子供を救おうとしているのである。私はこの雪童子の矛盾した行為に，〈自然の人間に対する暴虐性と愛情〉を読む。このように主題が凝縮されている文を私は主題提示文と呼び，主題を抽出させる場合に，それを徹底的に読ませるような指導をしている。

ところで私と同じ読みをしている論者が一人いる。

言ってみれば，この雪という自然，雪の恐ろしさ，雪の厳しさ，それは同時に雪のやさしさでもあるということです。自然というものの本質をみごとにおもしろくとらえているんじゃないかと思います(7)。

これは論文ではなく西郷竹彦の授業記録である。西郷はこのような読みを生徒達に粘り強く指導している。西郷が言う「激しさ，荒々しさが，やさしさなんだな。」という捉え方は，私の授業においても困難であった。つまり生徒たちには両義的な捉え方が難しいのである。

ではその他の主題観を見ることにする。まず〈雪童子の子供への愛情〉という主題観がある。

＊このように，「丘」を中心にその上と下とに「雪童子」と「赤毛布の子供」との二人の少年を配して紹介しているのは，〈雪童子が子どもに対して示す好意〉という主題を展開させるための導入なのである(8)。

＊「水仙月の四日」は，汲めどもつきぬ魅力を持っている。春近き東北の雪景色の上に，赤い毛布の子供と，雪婆んご，雪狼，雪童子を配して，静－動－静の構成の上に，暖かい愛の物語が展開する。その雪童子の愛を，子供は感づかないという一抹の寂しさを漂わせつつ，しかし，本当の愛とは，そういうものだと思えば爽やかである(9)。

前者が恩田逸夫，後者が渡辺芳紀の主題観である。また渡辺は〈冷たい吹雪の中に咲いた暖かな愛の物語〉とも論じている。しかし私はこの〈雪童子の子供への愛情〉というのは，分析批評で言うところの主材ではないかと考える。

＊雪童子はわらひながら，手にもつてゐたやどりぎの枝を，ぷいつとこどもになげつけました。（導入部）

＊「うつむけに倒れておいで。ひゆう。動いちやいけない。ぢきやむからけつとをかぶつて倒れておいで。」（展開部）

＊「さあ，ここらの雪をちらしておくれ。」（終結部）

雪童子が持っていたヤドリギを投げたのは，子供に対して親愛の情を抱いたからであり，わざとひどくぶつかったのは，子供を雪に埋めることによって凍死から救うためであり，雪狼に雪をけちらせたのは，父親に子供を発見させるためであった。このように〈雪童子の子供に対する愛情〉は，導入部から終結部へかけて一貫している。しかし私は展開部の雪婆んごや雪童子や雪狼による激しい吹雪の描写や雪童子の〈暴力性〉から，〈愛の物語〉という読みは一面しか捉えていないと考える。

次に取りあげるのは最も多く，〈死と再生〉という主題観である。

＊こうして，「水仙月の四日」は，生命の死と再生，いいかえれば生れかわりという深層主題を軸として成立している[10]。

＊冬から春へ季節はめぐりゆく。その最終段階にはらまれた，春を迎えるための，死と再生の物語。それを自然の側から描いたのが，「水仙月の四日」である[11]。

＊宿生木は，常緑であるということから，普遍的に生命と若返りを象徴し，物語全体のテーマ—子供（人間）及び自然の死と再生—にいかにもふさわしい[12]。

＊本作品の魅力はなんと言っても，一面の銀世界に灯る鮮烈な「赤」の色である。それは「眠り」から目覚めた「子供」がちらっとのぞかせる「赤い毛布のはじ」のあの燃えるような「赤」であるのは言うまでもない。白（眠り＝死）の世界にいま「新しい生命」が誕生した。子供は一回り大きな《少年》になって再生されたのだ[13]。

酒井角三郎，杉浦静，萩原孝雄，松田司郎らによって論じられているのは，〈自然の死と再生〉と〈子供の死と再生〉という主題観である。しかしこの作品において，多くの雪童子の発言に比して，子供の発言は一言もない。授業での雪童子の微妙な心情の読みとりは可能であるが，子供の心情の読みとりを中心に，授業を組み立てることは不可能である。これらの読みは深層心理的な読みでもあり，子供の心情理解を中心に主題を導くことは困難である。松田司郎が言うように，子供が再生して一回り大きな少年になったとするならば，どのような少年になったのか，またそれが論じるほどの価値があるのか疑問である。

次は佐藤通雅の〈宿命の逆転〉という主題観である。佐藤は雪童子の行為を「自己の宿命的な在り方を知るゆえに，何とかそこをプラスに逆転しようとする『祈り』の行為にほかならない。」と述べ，次のように論じている。

> 子供はこうして救われ，壮大なドラマも幕を閉じる。しかし，救われたのは子供だけだろうか。それは勿論ちがう。真に救われたのはむしろ雪童子というべきだろう。おのれの宿命的存在を逆転しようという不可能な試みに賭け，しかも可能にした。不可能が可能になったとき，天地自然はまばゆいばかりに輝き，絵の具箱がひっくりかえされたように色彩が交錯したのだ[14]。

この佐藤の論には雪童子の葛藤が捉えられている。しかし作者の葛藤処理に対する読みにおいて，私の読みとは異なっている。つまり佐藤は雪童子が〈暴虐性〉を克服したと読んでいるが，

私は自然の本質を〈暴虐性〉と〈愛情〉において捉えている。私には雪童子が宿命的存在を逆転し，吹雪を起こすという仕事から解放されたとは読めない。したがって〈暴虐性〉はその属性としてつきまとうのであるから，雪童子の行為にプラスとかマイナスとかの価値を付加するのは，間違っていると考える。

また佐藤は「雪嵐の壮絶さ」を雪童子が「自らの存在を逆転しようとしてなお逆転することのできない，身もだえるようなうめき」だと述べているが，「雪童子は笑ひながら，も一度ひどくつきあたりました。」や，「雪童子は笑いながら手をのばして，その赤い毛布を上からすつかりかけてやりました。」という描写から，軽やかな作調を感じ，雪童子が葛藤を内包してはいるものの，雪童子の行為に〈自らの存在を逆転しようとする身もだえ〉を感じるとることはできないのである。

次は三省堂の指導書の主題観である。

雪婆んごのきつい命令をかいくぐって，心の友である一人の子供を，水仙月の雪の中から救った雪童子[15]。

私はこの作品には自然に対する捉え方という思想性があると考えている。この主題観は筋の段階を越えていず，思想にまで達していない。

2　主要発問の考察

次に主題と関連する主要発問について，筋の順序にしたがって考察する。

第一に「『赤毛布』の〈赤〉という色彩は何を象徴しているか。」という発問である。酒井角三郎，佐藤通雅の論者は次のように論じている。

※おそらく，赤い毛布は，子供の生命の火を象徴しているのであり，カリメラ鍋や焔からは，生活の寓意を読みとることができる[16]。

※今，不吉な予感の前にあり，しかもそれには無自覚であることによって，毛布はいよいよ赤く，無垢な生命そのものの象徴とさえなっている[17]。

この両者の読みにはそれぞれ納得させられる。私の主題観は〈自然の人間に対する暴虐性と愛情〉であったが，この〈愛情の成就〉のためには，子供は助からねばならない。そのような読みと関連させると〈赤〉という色彩を，酒井角三郎が言うように〈子供の生命力〉の象徴と読むことができる。また佐藤通雅の〈無垢な生命〉という読みも，カリメラのことを考えている子供には調和している。また「オツベルと象」には「赤い着物の童子」とあり，「水仙月の四日」の素材と共通すると言われている心象スケッチ「日輪と太市」[18]には，「太市は毛布の赤いズボンをはいた。」とあることから，これらの用例を参照すると，子供の〈無垢な生命〉を作者は意識していたと考えられる。

第二に「雪童子はなぜヤドリギを子供に投げたのか。」という発問である。ヤドリギは柏や栗などにつく寄生植物で，親木が枯れる冬になっても生き生きとし，頭上にあって地上の危険からも免れている。このような不死性や安全性により古来から〈永遠の象徴〉とされてきた。杉浦静は

「雪童子の，孤独が，ひたすら家路を急ぐ子供に，やどり木を投げ与えるという行為をひき出した。」[19]と述べている。それは雪童子が子供に対して親しみを感じたからである。ヤドリギが〈永遠の象徴〉であるということを雪童子が知っていたかどうかはわからない。しかし作者は実生活においてヤドリギを使用していた[20]ので，この雪童子がヤドリギを投げるという行為は，子供が救出される伏線になっている。「作者はなぜ雪童子にヤドリギを投げさせたのか。」という発問に対しては，子供の無事を祈り[21]，子供が助かることを暗示するためという解答になる。

第三に「『雪童子はまるで電気にかかつたやうに飛びたちました。』という描写から，雪婆んごと雪童子の関係を読みとりなさい。」という発問である。雪童子が雪婆んごのことを恐れて，命令どおり慌てて仕事に取りかかろうとする様子が窺え，雪婆んごと雪童子の支配非支配という関係を読むことができる。したがって雪童子に葛藤が生じるのである。

第四に「『雪童子の瞳はちよつとおかしく燃えました。』は，『雪童子の眼は，鋭く燃えるやうに光りました。』と比較して，どのような心情が読みとれるか。」という発問である。「鋭く燃えるような」という表現から，もうすぐ雪婆んごが帰ってくるので緊張し，一生懸命吹雪を起こそうという心情が読みとれ，「ちよつとおかしく」という表現からは，吹雪を起こそうとしていたけれど，子供の声が聞こえたので，どうしようかと迷っている心情が読みとれる。このあたりから雪童子の葛藤が生じ始めているのである。

第五に「『雪童子はつぶやいて，ちよつと泣くやうにしました。』には，雪童子のどのような心情が表れているか。」という発問である。まず論者達の見解を見ることにする。

＊自分が〈やつた〉やどり木を，あの吹雪の中でも手放さず，ずっと持っていてくれた。その子供の振舞いに感激したのである[22]。

＊たわむれに与えたやどり木が，子供に大切に握られていたことに対する感動が雪童子に起きたのだ[23]。

確かにこの吹雪の中を自分が投げたヤドリギを持っていてくれたこと対する感動があるが，自分の両義的な存在故に，死に追いつめるほどのつらい思いをさせたことに対して済まないという心情を読みとることもできる[24]。

第六に「『まもなく東のそらが黄ばらのやうに光り，琥珀いろにかゞやき，黄金に燃えだしました。』という自然描写は，何を暗示しているか。」という発問である。これは夜が明けたことを示すと同時に，この明るい作調から，雪童子という自然のもつ愛情によって子供が助かることを暗示している。また〈死と再生〉説に加担することになるが，厳しい冬が終わり，明るい春が到来するという読みも成立する。しかしこれが主題ではない。

第七に「『子どもはちらつとうごいたやうでした。』には，何が暗示されているか。」という発問である。もちろん子供が生存しており，救出されることである。この結末によって，〈自然の人間に対する暴虐性と愛情〉という主題が成立するのである。

最後に「雪童子はなぜ子供を救ったのか。」という発問である。これに対して〈自然の人間に対する暴虐性と愛情〉という主題を成立させるためという解答では，味も素っ気もないが，別役実

は次のような解釈をしている。

「雪童子」というのは，定期的にやってくる水仙月の四日に「雪婆んご」に「とられ」た，つまり凍死させられた子供たちなのである。従って彼等は，現在「雪婆んご」の配下に数えられているものの，そうして水仙月の四日を「うまく済ます」使命を帯びてはいるものの，まだ凍死した子供たちを悼む気持がどこかに残され，「むこう」の世界の利害に従って行動してしまうこともあるのである。ひとりの「雪童子」が，その子供を凍死から救ったのは，そうしたいきさつによるものであろう[25]。

柳田国男の「遠野物語」に雪女が童子を引き連れて来るので，早く子供たちに帰れと戒めるという一節[26]があり，この別役の解釈はこれと関連していて非常に興味深い。遠野の伝承を柳田国男に語った佐々木喜善と宮沢賢治との間に，後年交遊があったことも事実なのである[27]。

結論

私はこの作品の主題を〈自然の人間に対する暴虐性と愛情〉と読んだ。それは，「『えゝ，さうです。さあ，死んでしまへ。』雪童子はわざとひどくぶつかりながらまたそつと云ひました。」という文を主題提示文とし，この雪童子の行為に，雪婆んごの命令に忠実な暴虐性と子供を救おうとする愛情を見たからである。そしてこの捉え方は，西郷竹彦の〈雪の恐ろしさ，雪の厳しさ，それは同時に雪のやさしさ〉という捉え方とほぼ同じものであった。この読みは岩手県に生まれ，過酷な自然状況の中で農民に農業指導を実践した，宮沢賢治の実生活と関連する読みでもあると考えている。

その他周知の事実と思われるが，「水仙月の四日」は終雪時期の調査[28]や水仙の開花時期の調査[29]によって，4月4日だと言われていることをつけ加えておく。

註

（1） 和田利男『宮沢賢治の童話文学』不言社　1949.4　p.147
（2） 寺田透「宮沢賢治の童話の世界」『文学』岩波書店　1964.3　p.21
（3） 酒井角三郎『極限の論理』筑摩書房　1970.7　p.254
（4） 佐藤通雅『宮沢賢治の文学世界』泰流社　1979.11　p.120　初出『路上』17号　1973.4
（5） 渡辺芳紀「水仙月の四日」『國文学』學燈社　1982.2　p.80
（6） 沼田純子『宮澤賢治　言葉と表現』和泉書院　1994.5　p.162
（7） 西郷竹彦責任編集「『水仙月の四日』の授業」『文芸教育』54号 明治図書 1991.2　p.151
（8） 恩田逸夫「宮沢賢治と天の童子」『宮沢賢治論3』東京書籍　1981.10　p.153　初出『明薬会誌』第77号　1970.1）
（9） （1）に同じ。p.85
（10） （3）に同じ。p.252
（11） 杉浦静「水仙月の四日」『國文学』學燈社　1986.5　p.130

(12) 萩原孝雄『宮沢賢治』明治書院　1988.9　p.126

(13) 松田司郎「二つの世界に立って」『国語教育』№13　三省堂　1991.11　p.9

(14) (4) に同じ　p.133

(15) 『現代の国語1』学習指導書下　三省堂　1993.3　p.195

(16) (3) に同じ。p.251

(17) (4) に同じ。p.123

(18) 杉浦静が (11) の論文 p.130 で指摘している。
日は今日は小さな天の銀盤で／雪がその面を／どんどん侵しかけてゐる／吹雪も光りだしたので／太市は毛布の赤いズボンをはいた (1922.1.9)

(19) (11) に同じ。p.131

(20) 萩原孝雄が (12) の論文 p.128 で指摘しているが，宮沢賢治が次のような書簡を残している。
もし三月来られるなら栗の木についたやどりぎ二三枝とってきてくれませんか。近くにあったら。(校本宮澤賢治全集第13巻　澤里武治あて255　1930年2月9日)
やどりぎありがたうございました。ほかへも頒けましたしうちでもいろいろに使ひました。あれがあったろう思はれる春の山，仙人峠へ行く早瀬川の渓谷や赤羽根の上の緩やかな高原など，をいろいろ思ひうかべました。
(校本宮澤賢治全集第13巻　澤里武治あて260　1930年4月4日)

(21) これと類似した論がすでに，(5) p.83，(12) p.126 にある。

(22) (5) に同じ。p.82

(23) (11) に同じ。p.131

(24) (15) の p.204 にこの指摘がある。

(25) 別役実『イーハトーボゆき軽便鉄道』リブロポート　1990.1　p.53

(26) 小正月の夜，または小正月ならずとも冬の満月の夜は，雪女が出でて遊ぶともいう。童子をあまた引き連れて来るといえり。里の子ども冬は近辺の丘に行き，橇遊びをして面白さのあまり夜になることあり。十五日の夜に限り，雪女が出るから早く帰れと戒めらるるは常のことなり。されど雪女を見たりという者は少なし。
(柳田国男「遠野物語」『柳田国男全集4』ちくま文庫　1989.10　p.59初出　1910.6　聚精堂)

(27) 佐々木喜善は宮沢賢治を1930年と1932年に訪問している。また宮沢賢治も佐々木喜善宛の4通の書簡を残している。(原子朗『宮澤賢治語彙辞典』東京書籍　1989.10　p.289)

(28) 恩田逸夫『宮沢賢治論3』「宮沢賢治の童謡」東京書籍　1981.10　p.148　初出「桃李」第2号　1969.12

(29) 谷川雁『賢治初期童話考』潮出版社　1985.9　p.90
尚，作品の引用は「校本宮澤賢治全集」(筑摩書房) による。